

審査の結果の要旨

氏名 笹屋孝允

学級経営は、児童生徒が学校生活において年間を通じて学級集団で学び育ち合う場を形成する要となる。本論文は、小学校中・高学年学級での学級経営過程について、授業中の学習規律の成立とその規律からの逸脱行動への対応に焦点を当て、1年間の学級経営過程の特徴を明らかにしようとした論文である。論文は、全5部9章から構成される。

第I部第1章では、1900年代からの学級経営研究の時代的変遷を概括し、授業中の学習規律に焦点をあてる必要性、特に逸脱児童と周りの児童、教師の三者間の影響関係を捉え、談話分析等の短期的相互行為分析と長期的視点から学級規律の変化分析を関連づけて捉える必要性を指摘している。そして第2章では、そのための研究法を論じ、日常自明となっている学習規律が明示化される、逸脱注意場面に焦点を当てた研究を論じている。

第II部では、小学校6年生3学級を対象にした質問紙調査から、第3章では教師および児童の学習規律の重要度の相違が年間を通してあり、児童間の個人差は年間で拡大する傾向にあることを明らかにしている。続く第4章では、児童の学校適応感や学級風土と規律重要度認識の関連性を検討し、特に学習規律重要度認識と学習志向性および学校適応感に正の相関があることを示している。

第III部では、逸脱行動に対する教師や周りの児童の対応からの、学習規律に関する学習過程を検討している。第5章では4年生15時間授業、第6章では5年生17時間の授業での逸脱事例から、教師や周りの児童が取る対応により、逸脱児童の学習規律評価についての判断基準が変化し学習していく自己調整過程と、教師や周りの児童の側も規律の基準を相互に調整し共有していく学習過程の両過程が力動的に生じることを明らかにしている。

そして第IV部第7章では、教室談話事例分析により、6年生授業での児童の私語を教師が学習内容と関連づけることで学習内容の多様化が生まれる可能性を示している。また第8章では筆者自身が担任教師として記していた4年生1年間の授業実践記録分析から、教師自身が年間を通して児童の実態に応じて授業像を変容させたり、より高度な規律を新たに導入し学習を高次化したりしていくことを描出している。そして第V部第9章総合考察では、知見を総括し学級経営過程研究への理論的意義と今後の課題を整理し論じている。

本論文は、学習規律と授業内容との関連性の検討など今後に残された課題もあるが、学級経営の年間の変容過程を、観察に基づく事例研究、複数学級での実証調査、自らの小学校担任教師経験の実践記録を用いた分析等の多角的視座から明らかにしようとした点で独自性が高く、学校教育学の新たな研究や実践に寄与する可能性をもつ論文である。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。